様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０６１７

研究課題名（和文）「個人化・私化・心理化」論の展開－社会概念の再構築を目指して

研究課題名（英文）the development of the concepts of individualization, privatization and psychologization---toward to the reconstruction of the concept of society

研究代表者
片桐　雅隆（Katagri, Masataka）

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：９０１１７９３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の課題は「『個人化・私化・心理化』論の展開－社会概念の再構築を目指して」である。本研究は、上記の課題のもとで、個人化・私化・心理化概念を総合的にとらえるとともに、それらの総合的な概念の整理のもとで現代社会の特徴を捉えることに成果があった。また、その研究を、南オーストラリア大学・ホーク研究所のエリオット教授らのグループと共同して行うことで国際的な研究を目指したが、国際会議の会議や共同著書や論文の発行によって十分な成果を出すことが出来た。国際比較の成果としては、エリオット教授の「新しい個人主義」の日本社会での現状に関する研究などがある。

研究成果の概要（英文）：The title of this research is "the development of the concepts of individualization, privatization and psychologization---toward to the reconstruction of the concept of society". We attached importance to the necessity of considering those concepts comprehensively in particular to understand contemporary not only Japanese society but also western countries. We had enough results in the comprehensive understanding of concepts of individualization, privatization and psychologization and analyzing contemporary society through it. And this research also had rich results in international studies with research groups of prof. A. Elliott:the director of the Hawke Research Institute at the University of South Australia through publishing a book and paper. Main results can be found in analyzing Japanese contemporary society applying his concept of the new individualism and they were published. And also we had opened our results of mutual studies by holding international conference.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：個人化　私化　心理化　自己論　現代社会論　社会的なもの　心的なもの

１．研究開始当初の背景

従来個別的に論じられてきた個人化・私化・心理化の概念を総合的に論じ、現代社会を見る視点を構築することが本研究の狙いであった。個人化は、E.デュルケームら、社会学創設期の社会学者によって論じられ、グローバル化した現代社会の文脈で、A.ギデンズや U.ベックらによって再帰的個人化として主に西欧で論じられてきた。一方、私化は、P.バーガーや T.ルックマンによって、60 年代、70 年代に、消費社会の進展の中で主にアメリカで論じられてきた。また、心理化は、90 年代以降のグローバル化した社会の中で、新たな自己のあり方として論じられてきた。これらは、個別に論じられてきたが、実は、相互に関連しており、それらを総括的に論じる視点が不在であった。

２．研究の目的

１．で指摘したような状況の中で、個人化・私化・心理化を関連した概念として総合的にとらえ、社会を見る枠組を再構築することが本研究の第 1 の目的である。また、社会分析のための新たな分析枠組の構築を、南オーストラリア大学・ホーク研究所の A.エリオット教授らの研究グループと共同で行うことで、国際的な研究を展開することも大きな目的であった。

３．研究の方法

（１）個人化・私化・心理化に関する先行研究を整理し、それらの関連性を明らかにし、3 つの過程を総合的に理解する枠組を構築すること。そのために、個人化・私化・心理化に関する文献の収集、講読を行うこと。

（２）個人化・私化・心理の概念整理をふまえて、それを、現代社会の分析に応用すること。

（３）個人化・私化・心理化をめぐる概念整理、それに基づく現代社会の分析を、エリオット教授らの研究グループと共同で行うことが、本研究の第 3 の研究方法である。そのために、エリオット教授と研究代表者が相互に訪問し、意見交換や研究報告の会議を開催した。

４．研究成果

（１）個人化・私化・心理化の概念の総合的な検討に関する成果

近年の心理化の傾向に関しては、3 つのことが言われている。つまり、第 1 に、心理化は、自己や状況をトラウマや鬱などの「心的なもの」に還元して説明する傾向、第 2 に、心理化は、「本当の自分」は自己の内部にあるという自分探しの傾向、第 3 に、コミュニケーションにおける感情意識化の傾向を、それぞれ意味している。これらの 3 つの傾向はいずれも、グローバル化の進展した現代社会の傾向として位置づけられてきた。しかし、心理化とは、心や精神に関する用語によって自己や状況を意味づけ、また、それらを鍵としてコミュニケーションを築く傾向であるとすれば、それは 19 世紀の心理学の成立と同時的なものと考えられる。心理学が心を行動の基盤と考える点では、心理化は、同時期から社会学で論じられてきた個人化と密接に関連している。

個人化は、社会学においては、19 世紀に E.デュルケームによって論じられ、現代では、A.ギデンズや U.ベックらによって再帰的個人化として論じられている。心理学に起源を持つ心理化が、個性や行為主体としての個人の成立を背景として成立したように、個人化も同様な基盤を背景としている。しかし、現代社会では、心理化と同様に、強い自己を前提としてきたそれらの傾向に揺らぎが見えている。その点を強調したのが、再帰的個人化論であり、近代社会初期の第 1 の近代から現代社会としての第 2 の近代への、自己のあり方の変化を、ベックは、「主体」から「準主体」への変化として説明している。また、先に示したような心理化の 3 つの傾向も、そうした強い自己の衰退を背景としている。

一方で、私化は、1960 年代、70 年において、消費社会の進展とともに深化してきた現代社会の傾向である。それは、単なるミーイズムではなく、大きな物語の解体という、強い自己を前提としてきた近代社会の変動と密接に関連するものである。この議論を展開した P.バーガーは、私化が心理化と密接に関連するものであることを指摘している。私化が、公的領域に変わって、私的領域が日常的な人びとの意味の探求の場になる傾向であるとすれば、セラピー文化やスピリチュアリティなどをとおした自分探しの傾向とも密接に関連しているからである。

このように、個人化、私化、心理化は、個別的な現象ではなく、相互に関しており、それは「社会的なもの」の解体や衰退の傾向と対比されながら、現代社会の傾向を分析する基本的な枠組と言える。

「社会的なもの」と個人化・私化・心理化の傾向との対比は、本研究の初期段階では発想されなかった視点だが、本研究を進める過程で、個人化・私化・心理化の過程が「社会的なもの」と対比的に論じられるべき重要な課題であることが理解された。「社会的なもの」とは、「社会的なもの」の解体や衰退という論点で語られてきたものであり、それは、一般には、国民国家を基盤とする社会と理解されている。したがって、「社会的なもの」の解体や衰退は、国民国家の解体や衰退を意味しており、また、それはグローバル化した現代社会の特徴として位置づけられてきた。しかし、個人化・私化・心理化が、現代社会の特徴を意味するだけでなく、近代社会の成立時から続くより長期的なスパンで論じられるべき課題であったように、「社会的なもの」もそれと同様に、近代社会成立時期から論じられてきた課題であり、そうしたより長

期的なスパンで、個人化・私化・心理化の過程と「社会的なもの」の関連を見ることが必要とされる。本研究の発足時からさらに展開されたそのような視点を応用した成果は、５①の「社会的なもの」と「心的なもの」の関連で震災後の日本社会を論じた報告や、今年公刊予定の論文「『社会的なもの』と『心的なもの』－心理化をとおして見る自己と社会」（『心理学評論』）に表されている。とくに後者の論文では、「社会的なもの」とは何か、「心的なもの」とは何かを体系的に整理し、両者の関連の中で自己や社会を位置づける視点を示しており、それは、本研究の体系的な成果と言える論文である。

上記に述べてきたように、個人化・私化・心理化概念の総合的な関連づけや、それらの過程を「社会的なもの」と対比的にとらえ、そのことで、現代社会の分析のための理論枠組を再構築することが本研究の第１義的な成果である。

（２）国際的な研究の成果

研究代表者は、南オーストラリア大学・ホーク研究所の A.エリオット教授らのグループとともに、個人化・私化・心理化をめぐる概念に基づく国際的な研究を目指し、その成果を、５．にあるような著書や論文として公表してきた。また、2014 年 3 月 18 日から 20 日まで、南オーストラリア大学・ホーク研究所にて、States of emergency---the emotional costs of global disasters and regional emergencies.というタイトルで国際会議を開催した。そこで、研究代表者は、A counter-relation between “the social” and “the psychic”---as a framework to consider Japanese society after great earthquakes.という報告をし、個人化・私化・心理化と「社会的なもの」との関連の中で現代の日本社会を分析した。また、この会議には、日本やオーストラリアをはじめ、イギリス、香港、台湾からも研究者が集まり、相互に報告や議論をすることで、国際的な研究やそのためのネットワーク作りに大きな成果を残した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①A.Elliott, M.Katagiri & A.Sawai, “The New Individualism and Cotemporary Japan”, Journal for the Theory of Social Behavior,42-4.2014,425-443. 査読有り.
(http://onlinelibrary.willey.com/journal/10.1111/(ISSN)1468-5914/issues)

〔学会発表〕（計 4 件）

①M.Katagiri, “A counter-relation between “the social” and “the psychic”---as a framework to consider Japanese society after great earthquake”. Forum: States of emergency---the emotional costs of global disasters and regional emergencies, 3.18.2014, The Hawke Research Institute at the University of South Australia.

②M.Katagiri, “”On Japanese Social Theory in Postwar Japan---in connection with individualization, 韓国社会学会大会、20,12,2013. ソウル大学

③片桐雅隆、「戦後日本における社会理論」、日本社会学会大会、2013 年 10 月 13 日、慶應義塾大学

④ M.Katagiri,”Recent Development in Japanese Social Theory”, Seminar of Hawke Research Institute, 25.10.2012, The Hawke Research Institute at the University of South Australia,

〔図書〕（計 2 件）

① M.Katagiri,”Three Selves in Japanese Society” A.Elliott, M.Katagiri & A.Sawai (eds.), Routredge, *Routredge Companion to Contemporary Japanese Social Theory.*, 9.2012. 139-157, 255.

②片桐雅隆「心理化する社会と労働」、人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書、第 245 集、片桐雅隆編『サービス労働のあり方と多様化する生き方』、2012 年 2 月、3-17, 73.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
片桐　雅隆（KATAGIRI　Masataka）
千葉大学・文学部・教授

研究者番号：90117937

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：